

2022～2024 年度 第3回 神奈川県産業教育審議会 審議概要  
令和6年1月25日(木) 10:30～12:30 神奈川県立神奈川工業高等学校 会議室

【出席者】◎角田 浩子、○杉山 久仁子、関口 明彦、村木 薫、佐藤 治、松本 里香、  
金井 徳兼、高橋 麻実、吉田 圭、宮坂 賀則、岩崎 秀太、片受 健一、  
石川 隆一

1 事務連絡(事務局)

- ◇資料確認
- ◇定数確認
- ◇会議の公開について

2 神奈川県教育委員会あいさつ(増田指導部長)

- ・神奈川県は知事を先頭に行政のDX化ということにも取り組んできている。そうした中、県教育委員会としても、令和6年度の神奈川県公立高等学校入学者選抜から、出願においてインターネット出願を導入した。既に新聞報道等でご存じかと思われるが、若干不具合が生じて、記者発表し、私も記者会見の中で謝罪をするという場面があった。
- ・とにかく受検という非常に大事な場面であるので、受検者に不利益を生じさせないということを第一に、今現在、早期の復旧に向けて取り組みを進めているところである。
- ・そうした関係で、本日は高校教育課長も出席予定だったが、教育局で対応中のため欠席となった事情を御理解いただきたい。
- ・令和5年度の専門高校研究実践活動発表会が令和6年2月5日(月)に開催される。基調講演として、本審議会の委員の神奈川工科大学の金井先生に御講演いただく。
- ・神奈川県の広報テレビ番組の「かなふるTV」に平塚農商高校の農業科の生徒が出演。令和6年1月28日(日)に放送予定。
- ・今後の高校改革を見据えて、御意見をいただきたい。

3 会長あいさつ(角田会長)

- ・前回は神奈川工業高校様の授業の見学、取組をご紹介いただき、非常に参考になった。今後の審議を行うにあたって、生かしていきたい。
- ・前回は、これからの審議を見据えて、各委員の皆様から幅広い見地から、貴重な御意見をいただき、改めて感謝申し上げます。
- ・本日は事務局から、今回事前に配付した中間まとめ案について、専門部会でも御報告いただき、いよいよ中間まとめにおける最終審議ということで、皆様から忌憚のない御意見、御提案をいただきたい。

4 新委員あいさつ

- ◇宮坂委員による自己紹介。

## 5 第3回専門部会の報告について（岩崎委員）

- ・令和5年12月22日（金）に第3回専門部会が開催され、中間まとめ案の確認をする中で、各専門学科の現状と課題、それから行政、専門学科高校に期待すること、行政機関や企業等が専門学科に期待することについて、それぞれ御発言をいただいた。それぞれその意見交換の内容は資料に記載しているものとなる。
- ・その中でも、課題解決型の人材育成が求められていることや、その育成には外部人材の活用、連携・企業等や団体、あるいは大学等との連携がどうしても必要になり、そういったところから刺激を受けることが大事ではないかと、そのような意見が出された。また、各学科が課題とすることや、今後の方向性についても意見が出され、この内容について、中間まとめ案に反映させていただいている。

### ○質問・御意見について（角田会長）

- ・非常に現実的な御意見が出されたと思う。外部人材の活用の必要性・重要性や、中高生の課題解決能力の向上に向けてどういふことをしていくべきかということ、この中間まとめでも、きちんと示していけたらと思う。
- ・質問や意見等はよろしいか。

### ○質問（吉田委員）

- ・12月22日（金）の専門部会にオブザーバーとして参加させていただいた。
- ・概要の中での「先生方が生徒に勧めるのはリスクだ」と言っていることの「リスク」というものが、どう捉えられているのかというのは、普通校と専門高校というのは、認識として多分違うという認識をされているのだと思うが、それを勧めるのがなぜリスクと捉えられているのかということが、根本的な問題として存在しているのではないかと感じた。
- ・そこが、言葉だけで流れてしまっている部分があるので、もう少しフォーカスされていくとよい。
- ・私の理解ではあるが、産業教育の個性をきちんと御理解いただいて、中学生の生徒のみならず、保護者の理解が得られているということも大切だと思う一方で、中学生と対面している先生方が専門高校をリスクだと言われるのが、事実であるならば、そもそも論の話になってくるのかなと思う。当然その専門高校の先生方と中学校の先生方とのやり取りとかもあると思うが。
- ・その辺は、私は民間でわからないので、伺いたい。

### ○進行（角田会長）

- ・高校側からと、あと宮坂委員からも、この実態のところをもう少しお話いただきたい。

### ○高校側の実態（岩崎委員）

- ・やはり専門高校のことを理解するというのは難しい部分もあると考える。例えば高校側として、中学校に出向いて、色々な専門高校の教育内容を話はするが、そこの部分の理解というのが、どうしても得られていないということが正直なところかと思う。私も色々な中学校へ行くが、初めて知ったという印象をよく受ける。説明はしても、やはりそこは中学校の先生方も、普通高校の出身の先生が多いので、専門高校のことを知らないということがあ

う。

- ・私も実は専門高校を卒業して教員になっているので、高校の実体験を踏まえて話ができるが、説明する側が専門高校を理解できているか、一方、説明の機会や方法というのが、専門高校は長く続いているが、課題として残っている。やはりそこはしっかりと、様々な場面でPRしていかななくてはならないのかなと感じる。
- ・そこで、その1つとしては、リアルタイムの情報提供というのが必要になると考える。これまで度々専門部会でも話が出たが、今、高校生や中学生については、色々な媒体を通じて情報提供を収集している。例えばインスタグラムとか、それから、X（旧：ツイッター）とか、そういったことで例えば海洋科学高校の取組として船舶運航コースで、秋にハワイに遠洋航海実習に行き、その実習の生徒の生き生きとした表情がリアルタイムで発信されている。それがインスタグラムという中で発信しているが、それを見ると、本当に子供たちが楽しそうで、何かこう生き生きと、教育活動をしているのだな、そんなものがすごく、SNSで伝わってきている。逆にそれを、高校側がこれからどんどん活用していくことで、より中学生に理解しやすいもの。情報が伝えられるのではないかと言うような気がしている。なかなかそこは難しいところであるが、やはり発信側の問題だと受け取り側へのその工夫が必要だなというふうに感じている。

#### ○中学校側の実態（宮坂委員）

- ・ここのリスクということが正直、どういうことなのか。中学側でも、中学校としてもリスクってどういうことかだと思う。
- ・特に、中学では中学生発達段階に応じた支援であるとか、それから進路指導を進めている。その中で中学生の段階で、また自分の整合性であるとか、或いは将来こうだろうとか、そういった部分が見えてこない。生徒はすごく多いので、その中で、専門高校を志望する生徒が少ない状況が、現実ある。
- ・あともう1つは先ほどお話が当たった様に、現場も経験の浅い教員がすごく増えているので、この理解というか、子供に、生徒一人一人に即した進路指導の中で、この専門高校っていうものを全部教員側もしっかりと理解して、その上で進路指導に向けた指導をしていくこともとても大事だと思うので、この中学側の、いわゆる進路というところで、子供には様々な選択肢があるため、そちらをもっともっと教員側が勉強しなくてはならないというところが、すごく課題として、今現実なのかなということを感じている。ただ、リスクとは全然思っておらず、ぜひ自分の専門性を伸ばしてほしいと、そういった思いを込めて、中学の教員は進路指導、支援をしていると思う。

#### ○（吉田委員）

- ・ありがとうございます。多分言葉の表現の問題かと思うので、質問した。
- ・何か課題があるというのは、理解ができたかと思う。今のお話を聞いて思ったのは、生徒に問題は特にないのかなと思いつつ、やはり大人の理解の促進、我々がきちんとそれぞれを理解することが大事なかなと感じた。
- ・中学生や中学生の保護者、中学校の教員、高校生や高校の教員もステークホルダー関係にあると思うので、このリレーションシップをどう取っていくのかということが割と大きい課題であると思う。そうすると、中学校の先生と保護者、高校の先生もコミュニケーションを

とる必要があると考える。そのことについて、外部人材として役割を果たしていくのが、我々民間の役割なのかなというのも強く感じたところである。

○進行（角田会長）

- ・ありがとうございます。一つの方向性が、少し見えたというところかと思う。中学生に対してのダイレクトな発信がもちろん核であるが、取り巻くステークホルダーの連携が、それには欠かせないということかと思う。それらがきちんと盛り込まれたような報告になっていければいいと思う。

6 中間まとめ（案）の説明（安井 GL）

- ・第2回審議会後、委員の皆様へ中間まとめ案を送付し、いただいた御意見について反映して、令和6年12月22日（金）に開催された専門部会において、内容や方向性について確認をした。専門部会后、意見を集約して審議会に中間まとめ（案）として審議していただくために、中間まとめ（案）の未定稿を、1月19日にメールで事前送付させていただいた。
- ・資料5の中間まとめ（案）の内容について、「Ⅰ 本県の専門学科における現状（取組）と課題」と「Ⅱ 本県の専門学科のあり方（方向性）」について、それぞれ説明する。
- ・「Ⅰ 本県の専門学科における現状（取組）と課題」の1、2については、それぞれの現状と課題について、各学科の内容を記している。
- ・「Ⅱ 本県の専門学科のあり方（方向性）」の構成については、1で全体の方向性、2で各専門学科のあり方について、記している。
- ・「Ⅰ 本県の専門学科における現状（取組）と課題」を踏まえ、「Ⅱ 本県の専門学科のあり方（方向性）」の「1 全体の方向性」では、各学科の特色を踏まえて、企業等との連携を強化するために、学科の目的に沿ったコンソーシアムを構築すること。また、企業との協力を得ながら、地域課題校についての探究的な学びに取り組むことで、将来的に地域や社会の持続的な発展を担う人材を育成するという方向性を、専門部会で確認いただいている。
- ・「Ⅱ 本県の専門学科のあり方（方向性）」の「1 全体の方向性」では、例えば、デジタル人材の育成に関する学科等の新設についてや、デジタルに関する最先端の技術当を教えられる教員が少なく、大学、短大、専門学校及び民間企業等との連携から、教職員がともに学んでいけるような機会が必要ではないかという御意見もいただいている。
- ・「2 各専門学科のあり方」について、専門部会での検討では、目的別コンソーシアム等を活用しながら、進めることとしている。さらに踏み込んだ検討が必要になるのではないかと考えている。具体には、専門高校の各学科において、どの様な取り組みができるのか、デジタル人材の育成を加速化するための新たな方策についてなど、最終報告に向けては審議していただければと考えている。
- ・また、専門部会にどの様な視点での議論を求めていくのかについても、委員の皆様にも御意見を伺いたいと考えている。以上、中間まとめ案についての説明である。
- ・なお、参考資料として、高等学校DX加速化推進事業、DXハイスクールという資料を一緒に配付している。こちらは、国から示されてるものだが、事業内容としては情報、数学等の教育を充実するカリキュラムを実施するとともに、ICTを活用した文理横断的な探究的な

学びを強化する学校などに対して、そのために必要な環境整備の経費を支援するというのが、国から示されている。具体的な、求められる取組例として、専門高校において、大学等と連携したより高度な専門教科指導の実施。実践的な学びを評価する総合選抜の実施等の高大接続の強化が示されている。県としても、予算化できるように、現在進めている。事業の補助上限額が1000万円（1000万円/1校）ということで、補助率が定額補助という形で、今回国が全額負担となる。非常にありがたいが、なかなか実施の条件も厳しくなっている。審議に御活用ください。

## 7 審議

### (1) 審議会の進め方

(角田会長)

- ・事務局からありがとうございました。
- ・事前に委員の皆様には、(案)全体をお読みいただけるということで、大きなポイントをご説明いただいた。
- ・これからの進め方について、もう一度確認をしていきたい。
- ・中間のまとめ(案)最終審議にあたって、本当に、これはどういうことだといった質問や、忌憚のない御意見をお願いしたいと思う。また、今年度中には本審議会として中間まとめを教育委員会に対して報告するというスケジュールになっている。例えば誤字、記載の誤り、あとは、こういったことを盛り込みたいという具体的なことも、ぜひ御発言をお願いしたい。
- ・そして、もっとこういったことがわからないと踏み込めないのではないかとということもあるかと思うので、今後の最終報告に向けて、専門部会へこういったことを調査してほしいといった依頼などでも結構である。様々な御質問・御意見、御提案をお願いしたい。本日は審議の時間はたっぷりあるので、ぜひ、全て出し切っていただき、12時20分を目途に、そこまですべて、まとめたいと思うので、どうぞよろしくお願いいたします。
- ・少し、丁寧に見ていけたらというふうに思う。この案の順番で、ぜひ進めていきたいと思う。
- ・「Ⅰ 本県の専門学科における現状(取組)と課題」、その次に、「Ⅱ 本県の専門学科のあり方(方向性)」だが、現状と課題も「地域人材」のところと「デジタル人材」のところに分けて、御意見をいただきたいと思う。
- ・こういった順番で進めたいと思うが、この進め方についていかがか。よろしければ、このように進めていきたいと思う。
- ・それでは最初に、「Ⅰ 本県の専門学科における現状(取組)と課題」、こちらもお読みいただいていると思うが、まず、1、2が記載されている7ページ途中のところまでで、御質問や御意見があればお願いします。感想でも結構である。

(佐藤委員)

- ・本当に感想めいたことであるが、今後の社会的な変化というものを見たときに、何が大きいのかといったところで、2ページの論点の1点目。少子高齢化というのが非常に大きな課題になっていて、高齢化が極端に進むと同時に、労働人口がものすごく減っていて、人材不足が明らかになってくるだろうというのがある一方で、例えば自動車産業などは電氣化すると裾野産業が著しく少なくなるという話もある。さらに言えば、労働人口の9割が実は中小企

業に勤めているということの中で、どういう変化が起こるのかというのは、実はこの産業教育だけではなくて、高校教育全体に与える影響はものすごく大きいというふうに思っている。

- ・その課題設定としてデジタル化の推進と、地域社会のというところに、両方にこの問題が影響を与えてくるのだらうと思っており、そういった表記がもう少しあってもいいのかと思うと。
- ・デジタル化にも後の部分にもなってしまうが、進んでいく社会に（進んでいく部分に）どう生徒をアダプトさせていくかという視点だけではなく、今後、起こっている課題に対して、生徒たちをどうサバイブさせていくのかという視点も少し議論の中で必要なのかなという気がした。
- ・専門部会の議論は議論であるので、この中間報告の全体像にどうこうということではないが、そういった、社会構造の変化というものを、見通していくということも、少し視点としてあっていいのではないかと思った。

(角田会長)

- ・もしかしたら、背景や、論点のところに盛り込んでいくということもあるかもしれない。
- ・今の御意見について、いかがか。関口委員や村木委員は、本当に直面なさっているかと思う。

(関口委員)

- ・まさに、今の人手不足も既に起こっていることなので、もう皆さんもそれについて疑問の余地はない。ただ、ここで議論するというか、さらにもっと先、数年後、10年後に世に出てくる人たちに向けての新しい教育は、自分の理解としては進められた。
- ・その、人手不足感みたいなどころと産業構造の変化というのは前提として、「当然だよな」というぐらいの理解でいたので、押さえとしてちょっと足りないという印象は確かにあるかも知れない。全体の中で、それでどうするのかという議論に向け、構成自体はそんなに自分としては違和感がなかった。全、中小企業その通りである。

(村木委員)

- ・関口委員と同感である。それと同時に、経営も、10年後20年後50年後と見据えていかなくはならない中で、生成 AI とか、そういうところがもう、人材不足をそれで埋めていくだろうというところであるが、それが芸術の世界等、色々な世界で、例えばもう作曲家が作曲をやめてしまう、小説家が小説を書かない、もうその上に行くものが、そういうものでできてる。先生方が多いので、ここで少しお伺いしたい。専門的な分野をいろいろ教えていて、何かそれが何か虚しくないのかなとか、何というのか、そんなときに、最終的には人間力というか、コミュニケーション能力というか、そういうところが勝ってくるのかなという結論には達したのだが、「なんかちょっと虚しいよね」みたいな、ことがすごく出てきたが、そこを拒否はしてられない部分もあるので。先生方の気持ちとしては、教える側としては、いくら専門なことを教えても、もうそれをロボットやコンピュータや AI が超えてきてしまっている。それがいいのか悪いのかわからないが、何かその辺をちょっとモヤモヤと感じた。

(角田会長)

- ・今、本当に岐路というか、そんな時だと思う。高校や大学等の先生方も、このデジタル社会に向かっていくときに、人間として、働き手として、教育者として。

(岩崎委員)

- ・今、お話があったように、専門の中でデジタルとか AI とかという部分の、虚しさというのはあると思うが、高校生の段階では教育の中の一つとして、人間としてコミュニケーション力を身に付けさせることがあるので、そこはすごく大事なところだと考えている。
- ・それから、あともう一つは仕組みというものを、最初に理解をしていないと、いくら AI だとか、デジタルだといっても、それを使うことが難しいのかなと感じる。高校段階で使うにあたっての仕組み、考え方をしっかり教えることで、それが、さらにコミュニケーションの醸成にも繋がるのではないかと考えている。
- ・今のお話にあった通り、入力すれば一瞬で、すぐ答えが出てしまうという考え方もあるが、答えに至るまでで過程というものを教えていくことが、教育としては必要なのかなと私個人としては考えている。

(角田会長)

- ・すごく深いテーマだと思う。御意見・御感想を、ぜひお願いする。

(片受委員)

- ・実際に本校では、前回授業を見ていただいた「かながわ P-TECH」という取組、IT 人材の育成のところで行っているが、我々教員サイドの考えとしては、あくまで AI 等は道具だというふうに考えているので、高校段階では、いかにその気持ちというか、マインドを育てるところに注視して取り組んでいる。特に今、実際に IT を活用して働いている外部の方の意見を聞きながら、なぜ御自身がそういう仕事に就いたのか、自分自身の高校時代からどういう勉強をしてきたのかということ、生徒が聞くことによって、何を今自分たちが高校段階で、例えば電気科の生徒は、どういうことがわかればいいのかということ、勉強している。
- ・そういったところを教えるのが高校では必要だと思う。マスコミでは色々なところで ChatGPT 等と騒いでいるが、あくまで、使うのは人間であるから、人間がどのようにしてその行動を起こして使うのかということ、しっかり高校段階では教えることが大事かなと考える。そこは、教員だけではなく、実際にそれを使われている社会人の方から話を聞くことによって、子どもたちが理解を進めていく。その様なことを、本校では取り組んでいる。

(角田会長)

- ・こういった状況の中での専門高校の役割というところを確認していきながら、この審議も進めていければなどというふうに思う。このテーマについて、他にあるか。

(吉田委員)

- ・去年の7月か8月ぐらいの、コロナ明けで、日刊工業新聞社のロボット展というのが、日本最大級のロボット展を行っており、そこで大企業さんのインタビューの仕事をさせてい

いただいた時に、大手ロボットメーカーの方が、F社さんとか、色々あるが、話を聞いて、全ての方が言っているのは、人手不足をロボットが解消しますという様な開発をしているといったことであったが、それを動かすのは人であるとか、いうことはしきりに言っていた。他方で、BtoBならず、RtoR、ロボットtoロボットで、ロボットがロボットを直していく時代にもなっていくというようなことも騒がれている。そこで、ここは注意深く産業の変動を見ていく必要があると思うが、その中で、私が少し個人的に思っているのは、教育の質を変えていく必要があるのではないかという点である。

- 今までの様な手仕事、手作業というようなエンジニアリングではなくて、もっとちょっとその人を動かして、ロボットを動かしていく人を動かしていくような人材を作っていく。と言った教育が必要ではないか。その一方で、希望がないのかと言うとそうではなくて、先ほど片受委員のお話にあったように、AI というものはツールであると。私が「かながわ P-TECH」に興味あり、オブザーバーとして参加し、見させていただいたが、ちょうど生徒が発表の中で、ビッグデータを活用して ChatGPT でそれぞれの思考を曲にするというソースを、自分たちで作っていた。また、Raspberry\_Pi という CPU を使って統計を取るようなソフトを自分たちで開発していたりと、子供たちはもうツールとして、かなり活用ができているということはあると思う。
- なので、もう少し子供たちに委ねてみて、託してみるというのも、大人としてやるべきことなのではないかと思う。その一方で、「かながわ P-TECH」のような目的別学習人材育成コンソーシアムというものが生まれづらいという環境も現状あると思うので、その部分が今後の中間まとめ以降の実施策として、具体的に入ってくることで、今考えているような課題を、少しでも生徒たちが解決してくれて、大人たちが溜飲を下げられるのではないかと思う。そういうところも盛り込めたらいいのではないかなと思う。私見ではあるが。

(角田会長)

- ありがとうございます。こちらに関して、いかがか？
- 今、吉田委員からあった目的別コンソーシアムについて、少し進むが、多くの学科で、こちらに取り組んでいる、あるいはそれを更にやっというとしているという、記述が見られたと思うが、こちらについて、もっとこうなのではないか、自分たちではこのように協力できるのではないかと、あるいは他の方法があるのでないか、とか、そういった御意見があれば、ぜひお願いしたいと思う。この中で、やはり目立ってくる、目的別コンソーシアムに取り組んでいる、あるいは取組を多くされているといった、現実の専門学科の努力、意識が見えたかと思う。いかがか？

(吉田委員)

- 質問である。書いてあることと、実際はどのぐらい乖離しているのかわからない。私見であるが、各学科の課題として必ず最後に、目的別学習活動コンソーシアムと書いてあるが、ほぼ同じ文章を書いてあるとした時に、これはもう入れておくみたいになっている一方で、きちんと具体的にやっている事例も書いている学科もある。実際、各学科によって、もしくは各学校によって少し差があるのであれば、この単一的な言葉ではなく、現状を理解

した上で、何ができるのかという話なのかなと思うので、書いてはあるが実際どうなのかなというところを伺いたい。

(片受委員)

- ・2ページのところに括弧一番下の段落に、全ての専門学科に共通する現状と課題というところまで、最終的に目的と目的別学習コンソーシアムっていうものを実施しているというふうに書いている。
- ・コンソーシアム活動という前に、基本的にインターンシップというところから、昔は始まっていて、企業と連携して専門高校の生徒が、実際に働くことに体験をさせていただくというところから、この事業が展開されてきた。そこで、もっともっと広く、色々な大学・短大生・専門学校、それから企業等の連携ということで、コンソーシアム活動というのが始まって、多くの方々が県の教育委員会に申し込みをしていただいているが、なかなかうまく展開されていないというのが実情である。
- ・うちは、こういう連携をやりますよと言っても、例えば、方法がわからないのでアクションを起こせなかったとか、そういった意味で、目的別にした方が、逆にコンソーシアム活動がうまく展開していくのではないかということで、この目的別というものを、使わせていただいているところである。
- ・神奈川工業高校に特化してみると、それができているが、工業高校の中で言えば、まだ目的別にできてないところは実際にはある。インターンシップだけで終わっているところ、それからデュアルシステムを一生懸命やろうとしているところ、そういったところが課題としてあるということを書かせていただいた。
- ・実際にやられているところもあり、やれていないところもあるので、それは各科の取組の中で書かれていると。だからそういう方向性としてはそれを専門学科全体として目指していくということで、この文章の中に落とし込んだといったところである。

(角田会長)

- ・よろしいか？実態は学校によってまたは、学科によっても差がある。まあ、神奈川工業高校さんが突出しているという状態なのかなというふうに思う。

(片受委員)

- ・すみません。ちょっとうちは走りすぎてしまって。申し訳ない。
- ・「かながわ P-TECH」は、県教育委員会と神奈川県と、それからアイ・ビー・エムと連携協定を結んで、まず神奈川工業でモデルを作って、そして全ての工業高校に展開していこうということで進んでいる。ただ、その「かながわ P-TECH」の事業も3年目であるから、基本的にこれからどうしていこうかというわけで、まだ検討している段階であるので、それがうまく回ったところで工業高校全部に下ろしていこうかと考えている。
- ・そういう点で、うちはまず特化した教員がやるのではなくて、電気科全員の職員で取り組み、これは誰でもできるような形を今模索しているので、まだまだ確立はできていないので、そういったところを各工業高校には提供していくというふうには考えている。

(岩崎委員)

- ・本校、吉田島高校は農業と家庭科の学科についても、特に家庭の学科については、やはり教える教員が人事異動で、一般のいわゆる共通教科の家庭科の教員が配置されて、専門教科課程をやるわけで、必然的に、例えば本校は調理、栄養関係と、それから保育・福祉の専門のコースにわかれて、そんな時に、専門調理ということで、大量に調理をしなければならないというのを、専門的なスキルを持っている教員は、申し訳ないがやはりいないわけである。
- ・ただ、家庭科の教員にそれを求めるのはなかなか難しい。必然的にこれはコンソーシアムを形成して、専門学校・大学・短大そして、企業の方々に来ていただいて、例えば、本校であれば、和洋中の料理をしているのは、現場に実際にお店を持たれている、シェフの方や調理員の方に、特別非常勤という形で来ていただいている。
- ・そういうことで、実際にはもう本当にコンソーシアムを形成しないと、家庭科の学科については、教育活動が一切できないというところが、ひとつ大きなところである。
- ・また保育福祉に関しての実習先がどうしても必要になるので、コンソーシアムを形成する中で、実習先の確保、それから、本校は開成町にありますので、地域の自治体の開成町と連携をしながら、あるいは小中学校・幼稚園も含めて連携をしながら、それこそ連携ありきの教育課程を形成しているので、このコンソーシアムの重要性というのはやはり学科によって、本校家庭科については、これは絶対に必要なものであると考えている。
- ・県教委が行っているコンソーシアムとの不十分さを学校でしっかりと補っていくというところが必要になるかなというふうに思う。

(角田会長)

- ・ありがとうございます。吉田委員、作られたような文章という気がするところはいかがか。

(吉田委員)

- ・いや、そんなことではなく、すいません、個人の私見で言うと、中間まとめ自体の件ではなくて、よくまとまっているなと思っている。あとはこのポンチ絵みたいな、この1枚があって非常にわかりやすいかなと。
- ・その、内容に関しては、特にないのだが、言葉、さっきのリスクーと同じで、言葉だけすぎてしまっている部分が、「やらなきゃいけないよね。これやらなきゃいけないよね。」と言って、言葉だけがすぎてしまっている部分があるので、実際に本当にやらなきゃいけないと思ってやっていらっしゃる学科もあれば、やらなきゃいけないって言われているからやっている学校も、もしかしたらあるかもしれないということの中の、その意識差みたいなものが、どこまであるのかというのが、言葉だけではちょっと汲み取れないと思ったので、学校によって何とかこれみたいな。
- ・私はその逆に、なぜ神奈川工業高校だけが突出していると思われてしまうのか、皆さんに共通のチャンスとして、これは得られているものにも関わらず、突出しているのではなくて、当たり前前のことを当たり前に行っているだけだと思う。決して突出しているなんてことはないと思っている。私たちもコンソーシアムを組むことはあるので、お互いに産業で補っていく、連携を組んでいく、お金を使わないで、皆、持ち出しでやろうというのがコンソーシアムの基本なので、それが、神奈川工業高校は当たり前前のことやっているだけだと思う。ただなぜ、それが突出していると思われてしまうのかというところが、逆に課題感なのかなとい

うのは感じる場所であるので、ここをちょっと伺った次第である。当たり前のことをやっている気がするが、それが、何かすごいことをやっているように見えてしまうということが、どうなのかというところは、疑問ではある。

(片受委員)

- ・例えば看護科で言えば、病院実習は当たり前のようにやっており、福祉科であれば福祉事業所に行ってやっているのは当たり前であるから、そういったものをコンソーシアムとして続けていくのか、さらに、今、国から社会に開かれた教育課程ということを言われているので、今後それらを土台にして、どうやって各学科で展開していくのかということも、もっと、それを目的別にした方がやりやすいのではないかと、あくまでもこの中の、中間まとめで書かれていることなので、全ての学科が全部やっていることは事実なので、特に問題ないとは思っている。

(角田会長)

- ・はい。ありがとうございます。当たり前だということも、全ての高校が認識するってということが重要なのだと思う。それを訴えていくような案・報告にしていくべきではないかなというふうには思っている。あそこは特別だからというような、そういったことが高校教育では、実は多い。しかし、それは全ての高校がやるべきことであるし、本当はやっていきたいことのはずであるという意識を、全ての専門学科と、各高校が持って取り組んでいければというようなことを少し強く入れるか。
- ・どの県でも、モデル校を作ればいいのだといった改革が多い。しかし、もちろんモデル校があるとそのモデル校のおかげでやり方を先にやってもらえるので、真似しやすかったり、自分のところに還元できたりということもあるが、どの高校も、ここに一步踏み出すのが、普通なのだと、そういうふうにするのが重要だと思う。

(吉田委員)

- ・その通りである。ただ一方で、やはり全く未知の領域を、何もない中で、手探りでやっていくというのは非常に難しいと思う。当然、当たり前だという意識でも、できて当たり前ではなくて、できるようになることが当たり前なのであって、そういうことをきちんと教える、なぜできないのかということも理解して、きちんとハンズオンしてくれるような、人がいないと、当たり前だからやるっていう押し付けみたいになって、あとは任せて、何でできてないのだという議論になってしまうので、きちんと、伴走できる仕組み、ハンズアップできる仕組みがないと、先生方もやりたくてもできない。
- ・忙しいとか、通常業務もあると思うので、きちんとそこを外部人材で担って、伴走して、そこに持っていくという仕組みが必要なのかなと思う。
- ・そこは、ある程度そういうふうにする体制もあるので、「一緒に頑張ろうね」みたいな部分はあってもいいのかなと思う。要は、「やるべきだよ」ではなくて、「一緒にやっとうよ」と思えるような内容にするのは大事なかもしれないというのは、正直思った。

(角田会長)

- ・だからこそそのコンソーシアムだというふうに思うが、そこで、ぜひ高校の先生方に、伴走をしていく仕組みというものをきちんと提案していけたらと思うが、そこについて、多分各委員の方々が、伴走していただける立場だと思いで、どのようなことができるのかとか、具体的にでなくても結構であるので、御意見を願います。
- ・松本委員、コンソーシアムの話になったので、もしそこに御意見・御提案あれば。

(松本委員)

- ・ちょっと話、変わってしまうかもしれないが、私はこの資料を読んで、感想というのは、こういう資料に慣れないので、少し違うのかもしれないが、このコンソーシアムをやっているだとか、色々なことが書かれていたけれど、何かその結果、どの様な人材が育ったのかなという情報がないなと思ひ、そこが少し読んでみたいなと思ふ。
- ・人材育成というけれども、とても何か魅力的な取組がなされている現状はわかるが、その結果、こういう人材が育って、例えばこういうところに就職して、重宝がられているだとか、そういうところが見えないからというのがあり、どうやっているのかな。と。

(角田会長)

- ・ありがとうございます。コンソーシアムを形成することが目的のように読めてしまうという様なことであるか。

(松本委員)

- ・その結果の話をちょっと、お聞きしたい。

(角田会長)

- ・そのへんのところいかがか。書かれてないことはないと思うが、どんな人材を育成していきたいかということで、背景であったり。

(松本委員)

- ・例えば、そういう取組をしたことで、こういう就職率といったことはないのか。就職率があがったとか、会社から求人がすごいとか、そういう成果とかがあれば教えていただきたい。

(岩崎委員)

- ・その成果として、なかなか数値として把握して出すことは難しい。
- ・例えば、いわゆる大学進学率が上がるっていう見方なのか、あるいは関連した企業に就職する率が上がったのか、ちょっとそこが、物の見方によって、どう捉えていいのかなというところは正直、どうお答えしようかなというところである。そのポイントか悩むところではある。教育活動の充実と、それがどういう進路に影響したかというその統計的な部分とが、学校でも把握しづらい部分もある。

(松本委員)

- ・ちょっと一歩引いてみていただきたい。お話あったリスクという言葉に引っかかるっていうことがあって、その中学生の先生が、言うリスクというのは、結局そういうところにあるのではないか。その後、どうなっていくのか、学生、生徒たちがどうなっていくのかという姿がちょっと、親として見えないと、やはり自信を持って先生も勧められない、無難など

ころに、大多数の子は一般高校にというところがあるのではないか。

(角田会長)

- ・教育活動の成果を、進路指導も、数字で見るとというのは、私はちょっと反対である。
- ・もちろん一指標ではあるが、教育は、これをやったからこうというものではないというふう  
に思っているのです。

(杉山委員)

- ・多分、評価の仕方であるのではないか。
- ・うちの大学では、教員養成をしていて、教員養成的な評価をすると、すごく悪い。
- ・形を就職率とかにすると、多分、色々な問題があると思が、その3年間の学びで、子供たちが、こういうことをしたいと思って入った。それで、どういうふうな3年間の学びで、どう  
いうことを考えるような視点を持たかかとか、進学の子もいるし、就職する子もいるし、  
違う色々な場面で活躍する場所はあると思う。どういう考えを持つことができたのかという  
ことが、何らかの形で、取ることができれば、それが多分フィードバックされて、あそこの  
学校に行くと、こういうことを思うことができる。
- ・こうなれるのだという話は、実は、大学生を見ていても、入った時点で自分が本当に何した  
いかというのは、かなり怪しい。それを、中学校の段階で高校を選ぶときに、先程のやはり  
リスクのところであるが、絞り込んだときに、自分は本当にそうなのかと思ったときに、  
普通校に行っていれば、必ずしもそうじゃないかもしれないけど、普通校に行ければ選択肢  
はいっぱいあるけれども、どっかの段階で絞り込んだことで、自分の選択肢がある意味そこ  
に固定されてしまうのではないかと思うこともあるのではないか。
- ・実は自分の息子の進学のとときに、専門高校で、もう少し専門的なことをやるといいのかなと  
思っていたが、やはり中学校の進路指導と息子の色々な話の中で、ちょっとその時点で自分  
の何がしたいかと言っていることが、本人としてあまり自信がなくて、それで、結局普通校  
に行ったという経緯がある。
- ・この一つは、資料の2ページのところに、中学生およびその保護者、地域産業界や上級学校  
ニーズに応えるためにと書いてある。そのニーズが何なのか、例えば工業科に求めるその、  
工業科の内容を中学生や保護者にわかってもらうようにするというのは、もちろんそうなの  
だが、先ほどの目的別学習活動コンソーシアムに、例えば企業の方がそこに関わってくださ  
る時に、企業の方がそこで関わることで、どういうことをそこで求めているのか。自分のと  
ころに即就職してくれるという事だけは多分求めているわけではなくて、関連するような仕  
事を大事だと思い、そういうことを目指してくれる人材を育てようとしているのであるとす  
れば、それは、その目的であらうと思うが、実は、もしかするとこの、ニーズの辺りが、は  
っきりしてない。
- ・特に、それぞれの学科で学習目的別学習活動コンソーシアムをする必要がある。それをして  
いきたいと、思っているのだとすると、何かその辺の洗い出しから、どこと、どういうふう  
に協力してやれるのかって言っていることを、考えていく。でも、そこを誰がサポートする  
のか、その体制を多分、県がどういう形にするかって決めないと、学校の先生方がそこをや  
るのは、通常の業務をしながら、すごく大変なことになってしまうので、そこを進めていく

ための、何か体制作りみたいなことを、検討する必要があるのかと思う。

- なんとかしておくといいいのかと思う。結局よくあるのだが、何となく、他人は確かに、こういうことしなくてはと言うが、私達はこれをしなきゃいけないからできないよねって言って結局動かないという。こういうことになってしまうのかなという、ちょっとそういう気がしている。
- このニーズに関しては、特に上級学校のニーズと言われていることが、あまりよく理解できない。上級学校とは、例えば大学ということか。その辺のことを実際にニーズとして何かやり取りをされていって定期的に何かを収集されているとか、そういうことがあるのかなのか。

(吉田委員)

- これも私の個人的な意見であるが、ウェルビーイングは何かというと、自分で自分の人生をきちんと選択できている状態だと思う。ただ、若ければ若いほど、経験が不足しているので選択しづらいという、その経験をいかに若いうちから、していけるのかということが教育だと私は思っている。
- これだけ多様化した社会の中で、一律の教育というのは難しいと思う。どうするのかというと、子供たちが自分たちで自分の人生をちゃんと選択できる状況を作るのが学校なのだと。その選択で得たものが進学なのか、就職なのか、これをこっちに曲げたりこっち向けたりということを大人がやってはいけないと思う。ただ、どうしても親の経験や、先生の経験で、こっちの方がいいのではないかと、あっちの方がいいのではないかとになってしまうということが、なるべくないように、学校の中で、幅広い経験を子供たちにさせるということが、多分このコンソーシアムの本質なのではないかと私は理解している。
- ちょっと別の話で、STEAMEXPO というのを私はやらせていただいて、アンケートをとった中で、先生方から言われる、私の中でちょっと違うのではないかと思っていることが1個あり、ここで言うのは変なのだが、大学ですることを、高校でやらないでくれというアンケートの結果が、何件か散見した。私はちょっと意味がわからない。ただあるのかもしれない。なので、そこは注意深く考えていくべきだなとは思いますが、大学だから大学だからというのが、高校だからではなくて、子供たちがいかに早い段階で自分の人生を自分で選択できるのかというところに注目していけば、率とかはどうでもいいと思う。
- その子がユーチューバーなったっていいと思う。それで、ただそのリスクをきちんと教えてあげることが大事。
- メリットとデメリット、リスクをきちんと周りの人間が、セカンドオピニオン、サードオピニオンできるかどうかというところが、ここで大事なのではないのかと思う。先生とか親以外のサードオピニオンが必要。企業からの意見で、もしかしたら自分はこうなりたいと思うかもしれない。
- すみません。アラン・ワッツという哲学者が、70年代におり、その方のスピーチがユーチューブで調べて出てくるが、約50年前60年前の学生に向けたスピーチだが、今の課題とほとんど変わってない。
- 子供たちは将来どうしたらいいのかわからない。この課題に私達がきちんと向き合っていく、

その上での選択が大事なのだということを伝えていく必要がある。進学するのがいいとか、就職するのがいいと決めつけるのではなく、「どうしたいのか」と言う機会を作っておけるというのが、この産業教育における、すごく大事なポイントなのではないかと考えている。これが普通校にできないこと。サードオピニオンができるということが、すごいことなのではないのかなと思う。

(角田会長)

- ・お話が、さらに本質的になってきたと思う。今の流れで、取り組んでいる方たちから何かあれば。

(片受委員)

- ・成果という部分では、数字に表せないと思うが、やはり、それぞれの専門教育がそのコンソーシアムで、大学や企業や色々な方々から、協力を得ることで充実していくというのが一番の成果だと思う。要するに、インターンシップもそうだが、学校現場で体験できないこと、例えば学校でも実習はやっているが、実際社会では、どういうふうに自分が受けている専門教育が展開されているのかを、知るということできる。そのことが一番強いかなというふうに思う。それによって、自分の進路選択、そういう社会では、「勉強していることがこういうふうに使われているんだな」じゃあ、進学しよう、こういう企業に行ってみようということがわかるようになるということは、一番のコンソーシアムでの成果であるのかなと思うので、そのことは、各学科ではなくて、どこかの中にこういう、「そういう気持ちが養える」とか、「育てていける」ということは書ければ、一つの成果が出ていくのかなというふうには思う。

(関口委員)

- ・私は民間出身で、比較的成果主義の会社にいた。成果という言葉になったので、少しお話する。今やっている専門高校教育の充実については大事だと思う。何の成果をどのように使っているのか議論されており、就職率とかではないので、もちろんそう思う。
- ・企業では、いわゆる KPI 等があるが、教育現場では何か計る指標で確立されているのはあるのか。
- ・先ほどのお話で、生徒がいかに充実して、学んで、その上でその先に、充実した上級学校での学習なり、就職した企業での、幸せや充実した生活を送っていく。多分それが担保される、ことが究極的である。もちろん本当に究極はそれで、もっと日本の産業が発展すること。
- ・それには、卒業生のその後のフォロー、アンケートとか、そういう何か満足度調査みたいなことはされているのか。あるとすれば、その満足度調査で、もう少し、コンソーシアムに取り組んでいる学校とやってない学校で、体験した生徒の満足度に差があるとしたら、コンソーシアムの成果だと堂々と言えるのかなと思う。

(増田指導部長)

- ・卒業年次の1月頃に、「魅力と特色のアンケート」がある。これは毎年全員、全ての専門学

科で、中学時代と比べて高校からの3年間の学びで、こういったところが伸びているかとか、いくつかの項目にわかれているが、調査を行っている。

- ・ただ、卒業年次を取っているのですが、その回収率 100%ではない。比較的そういった中で、高校の学びで、中学よりもこういうところの力がついて、こういう考え方が身に付いた、というところは、アンケートをとることはできている。
- ・我々も、県の施策の中で、先ほどお話された様々な KPI を求められるが、教育委員会は常にそれで苦しんでいる。要するに、他の政策と比べて、数値化して、バンと出しにくいものである。そこで、どうしてもその魅力特色アンケートに、すぐに寄っていく。それを生かしながら、評価している現状がある。

(関口委員)

- ・わかりました。ありがとうございます。

(角田会長)

- ・それは、コンソーシアムだけの成果かは、もちろんわからないわけであるが、現場の先生方は大いに重要な施策であるという認識ではいらっしゃるということと、やりっぱなしではないということと、目的があるということと、それも含めた専門教育全体の成果を図る仕組みも一応あるということで、それらをきちんとみていかなければいけないと思う。
- ・あと、30 分ぐらいであるが、関連のところで言い足りないことがなければ、デジタルの方に行こうかと思う。

(片受委員)

- ・一点だけ。コンソーシアムについて、書き落としたことがある。やはり、なぜ各学校に広がっていかないかという点、これはコンソーシアムを担当するのが、全て教員になっているという部分が、一番課題だと思っている。
- ・今、言われているのが、コーディネーターの配置である。そういったことをうまく連携していただける外部人材の活用だが、そこが重要になってくるかと思う。
- ・色々なところで、国でも、産業教育全体の審議会の中でも、コーディネーターの配置について言われているので、そういうことも、少し、この中に書き込まないといけないと感じている。どういう配置なのか、予算的なものもあるが。

(角田会長)

- ・強く入った方がいいと思われる。

(片受委員)

- ・コーディネーターの方がいていただければ、各学校で教員が授業をやりながらでも、うまくコンソーシアムが繋がっていくのかなと思うので、その点は、書かなくてはならないかなと思う。

(関口委員)

- ・因みに、前回も聞いたかもしれないが、県立高校生学習活動コンソーシアムの会議を年2回ぐらい開催しており、私も参加している。そこでも、コーディネーションみたいにやっている様だが、関係はあるのか。

(片受委員)

- ・各地区にコーディネーターという方はいるが、コンソーシアムの中の、いわゆるインターンシップの仲介をやらせてもらっているので、まだまだ、その目的別までいってない。
- ・あくまで目的別ということについては、新たにここで提言させていただいているので、では、そういう人材をどう作っていくかということも、今後検討していく必要があると思っている。

(角田会長)

- ・ありがとうございます。それでは、7ページ。「3 専門学校におけるデジタル社会の実現に向けた人材育成に関する現状と課題」と、もう合わせてしまいまして、12 ページ、「今後の専門学科のあり方」まで、含めてご感想やご意見をいただきたいと思う。13 ページのポンチ絵が非常に参考になるかと思うが、忌憚のない御意見をお願いしたい。

(角田会長)

- ・金井先生。ぜひこちらお読みになった御感想や御意見、御提案があればお話しいただきたい。

(金井委員)

- ・前半の色々皆さんの意見で、議論していただいていたかも知れないが、高校は卒業した後に、社会に接続していかなければいけない。
- ・その時に学校だとか、企業だとか、社会だとか、どのような人材を求めているのかというのが重要であると思っている。
- ・そういう中で、私が体験させていただいたことを言うと、高校生は、高校3年間の中で、いわゆる企業人の方々と接する機会は、かなり少ないのではないかと思う。
- ・大学生は、時間外など結構色々な形で、そういう接点がある。やはり、議論されているが、社会人というか、いわゆるキャリア教育というのをしっかりやっているところが根底にあり、将来像を描けていけるのではないかなと思う。
- ・専門高校は色々な学科があり、それを中学生の段階で選択することは、かなり難しいのではないかと個人的には思う。もう少しの入口のところを柔軟に取り組みれることを導入し、入学後に学ぶ動機付けを行うことも必要だと思う。
- ・入学後に、色々な体験、経験をしながら、自分がこういうところで活躍していきたいという動機付けを行っていき、例えば電子工学などを学びたいと思った生徒は、コンピュータだとか、インターネットの仕組みを作るのではなくて、例えば、農業とかの分野もこれからはDX化されていけばいけないと思ったのであれば、そういうところと電子工学的なところとをジョイントして、学べるような仕組みを、学校間で連携しながら作っていく。これは少し難しいところがあると思うが、そういうふうな、新しい取組等もぜひ盛り込んでいく方が、よろし

いのではないかと感じた次第である。

- ・大学も色々な学部学科があるが、ある企業に対して人気がある学科と、そうでない学科があり、卒業した時点で、就職で苦労する学生さんが多い。
- ・おそらく学生の問題ではなくて、学生はやりたいと思ってその学科に入って一生懸命勉強したが、実は卒業した後には、そういう分野で就職できる場所はそれほどなかったということになってしまっている。
- ・学んだことを生かせずに、違う分野で働かざるを得ないといった、ちょっと負の感覚をえながら進路を決定しているケースもあるので、やはり、その出口というか、進学する、就職するという受け皿も考えながら、専門学科のあり方を検討していった方がよろしいのではないかと思う。
- ・多分、少し偏見かもしれないが、学生さんの中にも、化粧品会社で働きたいとか、医薬系のところで働きたいという希望があるが、企業はそれほど、たくさん求人されてないと思う。そこを、やはり、この学科編成を含め議論する段階で、もう少し産業がどういう人材を求めている、どういうふうなスキルを求めているのかなというところを含めながら、全体像で検討をしたらよろしいのではないかと感じた。

(角田会長)

- ・ありがとうございます。
- ・そういう御意見は、現在の神奈川県の特設学科の再編をしても良いのではないかとということであるか。

(金井委員)

- ・そうではない。そんなに強い意味ではない。
- ・ただ、例えば、自分の子供が、中学生の段階で工業系とか専門学科で勉強したいとなった時に、どこに行った方がいいと、私は自分の子供に対してアドバイスができない。農業に行くのか、工業に行くのか、やはり、意見しづらいと思う。中学校の段階で、普通高校と違うところで学んでいきたいって言われたときに、どうなのだということを、なかなか説明しづらいのではないか。
- ・あとは、戻ってしまい恐縮だが、普通高校でさえも、結構毎日、きゅうきゅう詰めの時間割なので、学習している中に、工業だとか農業を入れるとなると、実習や実験があったりして、さらに、これにコンソーシアム活動が入ってくると、本当にできるのかと思う。
- ・かつ、進学するとなると、普通高校と同等の学力を担保して、進学していくとなると、実現可能な領域が多分あると思う。
- ・この審議会の中で、その解を検討することが必要ではないかなと思っている。

(角田会長)

- ・ありがとうございます。

(片受委員)

- ・基本的に、これは今に始まったことでなくて、我々の時代からかもしれないが、中学生の高校選びは、まず普通科からである。まずそこは崩せないと思う。まず普通高校に行けるのであれば行って大学進学したいなという、そこは、社会はそういう構造になっていた。
- ・その中で、残念ながら、普通科高校でちょっと厳しいなという生徒に初めて専門学科が出てきたという時代があったと思う。
- ・そこを何とか払拭したいなと思っているのが、我々専門学科の担当である。そこで、もっともっと PR しなければいけないし、逆に言うと、専門の中にいる生徒たちが中学校に行って、「私達はこんなすごいことをやっているんですよ」ということをアピールして、そういう先輩になりたいなというふうにも思ってくれればいいなと考えている。
- ・それが、吉田委員と一緒にやらせていただき、横浜 STEAMEXPO という新たな取組で、これはどんどん周知していきたいと思っている。
- ・そういう状況を考えて、我々専門高校に携わる者は、検討しないとならない。
- ・コンソーシアム活動は授業の中で取り組んでいるので、例えば課題研究であるとか、電気であればプログラミング技術の授業の中でやっているの、新たなものとしてはやっていないので、それほど窮屈にはなっていない。どこの学校でも、そこはできると思う。
- ・昔は、例えばインターンシップ等は、夏休みとかアポを受けてやってそこの教員の負担になっていた。
- ・やはり働き方改革であるから、できる範囲の中で、先生方もやはり勤務時間が決まっている、生徒の時間割も決まっているので、その中でも落とし込んでいくことが大事なのではないかと思う。

(金井委員)

- ・反対しているわけではないが、例えば、DX ハイスクール、数Ⅲまできっちりやりましょうみたいな話になっていて、本当に今の工業高校のカリキュラムで、数Ⅲまでやっていけるのか、物理Ⅰ、Ⅱまでやっているのかというところがあり、その辺は何か、今のままで、いいのかなというところが一つある。
- ・その辺は、また別の次元で議論されながらで結構だと思うが、学習とは、好きなことを見つけて、フロー状態に入って、自ら課題を見つけていき、どんどんやっていくところが、本当の学習であるから、これやれ、あれやれという話ではなくて、改革されるならば、そういうふうな専門高校に思い切って変えていっていただき、より普通高校ができないようなことを、どんどん盛り込み、それを PR して変えていく。そういうチャレンジが必要ではないなと思う。
- ・多分、先生がお話しされたように、私も昔までは、専門高校というと、進学もちょっと難しくなって、資格取って就職しましょうというふうな進路でしかなかった。
- ・現在、本学でも、大学院に行ったり、博士を取ったり、そういう活躍する専門高等学校のご出身の方もおられ、時代も大きく変わっているので、そこにフォーカスしながら、もう少し普通高校と差別化して、いいところを出していただけるというようなことが実現できればと。

(片受委員)

- ・そういった意味では、専門高校の特色としては課題研究がある。総合的な学習の時間を普通高校で始めるより前に、専門的に課題研究というところを充実してきたので、そこが一番大事かなと思っている。
- ・例えば、現在は普通高校では、総合的な探究の時間を新たに起こして、普通科でもそういうものやってみようというふうになっているので、専門学科としては一歩先に出てやっていて、その充実を、校内だけではなくて外部の方々の力を借りてというのがコンソーシアムであると思う。
- ・それからこの DX であるが、これは専門学科が書いてあるが、文章を全部読んでみると、私見としては、これは、国が言っている普通科改革のための予算だというふうに、基本的にはそっちの方に重きを置いているのかなと思っている。
- ・ただ、もう専門学科も頑張らなければいけないので、DX を申請していくが、そこでどういうふうに充実していくのか。ここに最初に書かれている通り、情報Ⅱとか数Ⅱ・数B・数Ⅲ・数Cの履修率がと書かれてしまっていると、それをやはり専門高校でやろうとすると、必修はできないので、選択科目を置かざるを得ない。という課題はあることはある。
- ・ただ、例えば、神奈川の例ではないが、東京都では東京工業大学附属科学技術高校とか工業系の高校があり、これは進学がほぼ 100%である。結局、数Ⅲまでしっかりできている。なぜ、それが我々の県ではできなのかということも、今後、検討していかなければというふうには思っている。

(角田会長)

- ・もしかしたら、振り切ったカリキュラムの改編ができるようなところが、出現するとか、そういうことも必要なのかなと思ったが、現状の中で課題研究を軸にして、より頑張っていくという方法も考えられる。
- ・神奈川県の高校で全部やっていきたいことであり、さらに、高度な振り切った内容をやっていく学科が、専門学科の中で誕生しても、いいのかなという気もした。いかがか。

(片受委員)

- ・まだこれ、中間まとめなので、この今後のあり方の中の工業で書いてないのですが、あと総合産業でも書いてないが、実は工業高校の中で総合技術科という学科を開設して、工業を中学校の段階で学びたいが、例えば機械とか電気とか化学に絞れない生徒というのは昔多かったんで、何か物作りたいなど、そういった生徒のために総合技術科を作った。
- ・当初は人気があったが、残念ながらここ数年、毎年、総合技術科が定員割れである。
- ・川崎、平塚、藤沢、商工とあるが、やはり、その目的がわからない。何を勉強したらいいのかわからないというのは、中学生から実際に聞くと、やはり、その改編が必要かなというふうに思っている。
- ・昨年度、東京都も工業高校の改革ということで総合技術科を作ったが、残念ながら全て定員割れだという。東京都が失敗をして、実は神奈川県が作る前、大阪が作ったのだが、大阪の方でもて失敗している。ここの改革は絶対必要だなと思う。
- ・東京都が成功したのは、いわゆる科学技術高校にした学校。神奈川県でいうと鶴見工業高校

を横浜サイエンスフロンティアという進学重視の科学技術系の学校にして、もうこれは、本当に毎年人気がある。

- ・そういうふうに工業の総合技術科も、いわゆる科学技術科ぐらいにしないといけないのかなと思う。やる内容は工業の内容、いわゆる工科、そういう学科改編が必要かなということは、まだ書いてないが、書きたいなというふうに思っている。
- ・それから総合産業高校という、相模台工業高校と相模原工業技術高校とが再編統合して、産業を広く学びましょうと、国からSSHの指定を受けた。その時は本当に外部連携をしてやって、もう本当に進学重視でやっていたが、残念ながら、そこが薄れてきてしまったので、ここをやっぱりそういうふうな改編が必要かなというふうに思っている。
- ・ただ、一番問題なのは、工業科の教員がそういう意識改革ができないというところ。やはり工業教育をやりたいという教員が、まだまだいるので、ただ、そこは学科改編をやることによって変えていくことが必要なのかなと思う。
- ・そこは、例えば進学重視でいっても、就職している生徒もいるので、学校の中で色々と勉強しながら、自分の進路選択ができればいいかなと考えている。そういうところも、最終報告の中には、書きたいなというふうに思っている。

(金井委員)

- ・山梨県の例だが、専攻科を持っている高校があって、いわゆる3年終わって2年間さらに学習をする。専攻科もぜひ、神奈川県で作っていただきたいと思う。

(片受委員)

- ・すいません実は私、教育委員会側にいた時にそういう要望を受け、専攻科について考えたが、実は神奈川県では桐蔭高専、サレジオ高専、幾徳高専があった。しかし、幾徳高専は神奈川県工科大学に変わっている。桐蔭高専も桐蔭横浜大学に変わっている。そういった部分でいうと、神奈川県の中で高校の専攻科というのは、実際には求められてないということが現状である。
- ・それよりも、大学に行った方がいいというのが、神奈川県内の考え方であると、教育委員会にいた時に考えた。なかなか、専攻科は難しいのかなというのが、今のところ、私の私的な意見としては持っている。

(金井委員)

- ・同じ学校で継続して学習することが大きなメリットがあって、環境が変わらなくていい。それは大学進学とは違った意味で、連携学習ができる。
- ・さらに、そのさらに上に、大学に行きたかったなら、専攻科から、編入という可能性もある。もう少し何かそういう学びの幅を広げるといって、例えば、こういう3年間に限らず、5年間の学びがあってよろしいのではないかな。

(片受委員)

- ・逆に、中学校サイドでいうと、専攻科イメージはどうであるか。

(宮坂委員)

- ・正直、かなり1人1人の支援に努めているが、やはり先ほどからもお話がある通り、キャリア教育として、学校の格差もあり、学校間での違う部分ができている。
- ・その中で1人1人の将来を見据えた力を育んでいくために、進路指導をしているが、教員の方がなかなかそこに追いついてない状況があるかと思う。
- ・今日、一番感じているのが、やはりこれだけの協議をされていて、これでだけの取組の検討をされているところが、伝わっているかと言うと、やはり中学校側の理解としては厳しい状況である。そういった意識で教員が、例えば進路支援指導とか、そういったこともできてない。子供たちの意識もそういった部分では必要である。そういう状況である。
- ・そこで、中学校として、やはりキャリアの部分で、もう一度改めて考えていくということと、外部からの人材の支援をいただきながら進めていかないと、中学校も、今一杯いっぱい状況であるので、難しいなと思って聞いていた。
- ・中学校側の立場ではすごく意識が低い、そんな感じがする。

(角田会長)

- ・高校の先に繋がる学びの場があるということ、具体的な情報で伝えるということは専攻科と限らず、重要である。

(吉田委員)

- ・デジタル化の話に入るところだったが、佐藤委員がおっしゃる二つの課題が一緒ではないかと思う。一緒にするべきということに私は賛成で、二つに分けて時間をかけるよりは、一緒に解決できることがいい。
- ・プラスして、先ほど他の委員の方も気にされていたが、先生のリテラシーの問題。
- ・リテラシーレベルの問題がある一方で、先生の時間を十分に取れなかった。
- ・新たな学科、新たな時間を作るというのは難しい。
- ・であるならば、今できること、極端に言えば、簡単に組み立てることから、一個一個積み重ねるのが大事である。
- ・その先に、コンソーシアムのくだりがある。
- ・私は1枚、自分の中で、今回どの様なものがあるかなと思い、作らせていただいた。
- ・もし、よろしければ、やはり参考資料であるが、ぜひ、この後の専門部会で委員の方に、一つの議論として、話をしていただけないかなと思っている。
- ・要は、新しいものを作るのは難しいが、今の問題が何かというと、多分、ブランディングというものをずっと続けてきたと思う。産業教育はこうだよといった。
- ・しかし、社会の思っているブランド、産業教育のブランドと学校や教育が持っているブランドに乖離が生まれている。
- ・もっと言えば、産業構造で言えば日本の例えば中小企業は、未だに下町ロケットみたいな印象を持たれている方が多いと思う。親御さんたちでも。しかし、実際はベンチャー企業とかたくさんでいる。何が違うのかというと、イメージ戦略というのをしっかりと考えていく

べきなのではないのか。

- ・参考資料について、お話させていただく。提案と言うよりも、もしよろしければ審議に向けて、社会に開かれた教育課程における価値の再構築っていうものを考えていくべきなのではないのかなと思う。
- ・Society5.0 に向けた人材育成を実施するためには、産業教育審議会の間まとめ以降で、より具体的な策を検討することが必要である。
- ・その中で、前回の専門部会の中でリラベリングという言葉が出てきた。それを引用させていただいたが、三つ大きく掲げさせていただいている中で、各校の学科名の変更。これが一番初めに皆様の思うところで、「電子科、機械科」と言われると、やはり少し専門的なのではないか、もしくは、何々高校の機械科と何々高校の機械科の差がわからない。ここを埋めるためにはやはり、単純な名称変更ではなく、名称変更するにあたっての各校が改めて自校の魅力を検討し、自校の価値を再確認して、教育課程を含む変更を行う、価値の再構築が必要なのかなと思う。
- ・その上で、先ほど片受委員からもお話のあったコーディネーターというところが、P-TECHも、メンターもそうであるが、自分たちがどこまで関わっていいのかというところが見えない。どこまでやっていいのか。
- ・そこで、1969年にアメリカで提唱された、組織開発コンサルティングの名称なのだが、プロセスコンサルテーションという言葉がある。
- ・日本で言うと、メンターというよりはファシリテーター、ファシリテーターというイベントを進めるイメージがあるがそうではなく、全体を外部の人間が進めていき、先生たちと一緒にやってみようというような役割を担う人材。
- ・リラベリングをすることで、どうしても各校の教員に少なからず差がでると想定されるので、メンターで「聞いてくださいね」「言ってくださいね」ではなく、「一緒にやってみよう」というような、ファシリテーションを行える外部人材というのが、各校に専属で配置すべきなのではないかなと思っている。
- ・その上で、これは私のあくまでも私案であるが、生徒向けの目的別学習活動コンソーシアムだけではなくて、教員向けというのも考えていいのではないのかなというふうに思っている。
- ・プロセスコンサルテーション導入にあたって、新たな取組の創出ではなく、既存の取組を応用して行うことが望ましいと考えているので、神奈川工業高校が提唱している目的別学習活動コンソーシアムを活用して、P-TECHであったり、次世代建築リーダー育成コンソーシアムのように、各校が上級学校や企業の外部人材を学科のリラベリングを行うことを目的にコンソーシアムを組み、各校の教員が中心となって自校の価値の再構築を行う。
- ・これは、私が勝手に考えたのだが、「次世代教員人材育成コンソーシアム、神奈川グローバル EP」を設立するということ。これは、少し空想科学の様な話であるが、ここを考えた時に、まずできることからいうと、学科名という今まであった印象を変えるための名前を検討するためのコンソーシアムで、こういったコーディネーターを入れたらどうであるかというところを、少し、時間の中で提案させていただいた。

(角田会長)

- ・具体的な方法をご提案ありがとうございます。
- ・中身が変わっていくことと、それがどう見えるかということを引き出し、それがうまくいくために、ということを実際にきちんと仕組みとして考えていなければならないという、貴重な御意見であった。

(吉田委員)

- ・デジタル人材というものを、皆のスマートフォンとか、サイエンスフロンティアとかカタカナ言葉は多様化されていると思う。
- ・グローバルということ考えた時に、今後のカタカナ言葉というものが、もっと一般的になっていく大学とかの学校は、例えば農業大学でも農業デザイン学科が、一昨年ぐらいに新設されたり、割と何か、カタカナが入ってきていて、そのことによって、そのもののイメージが少し膨らむこともあると思うので、ぜひ、この名前の変更というのを考えていただければと思う。

(角田会長)

- ・ありがとうございます。
- ・時間が迫ってきたが、御意見いただいている石川委員と高橋委員から、御感想でも結構なので、御発言いただきたいと思う。

(石川委員)

- ・議論がもう、ちょっと広がっているので、どこで何を言っているのか分からず、タイミングを逸していた。
- ・一つは、私は横浜市の教育委員会にいて、県立高校は直接所管してないが、私どもが所管している中学校は、かなりの数が県立高校にお世話になっているので、中学校でもやはりキャリア教育について、専門部会のところを書いてあるが、職場の特色、職場体験とか、実際に全校でやっている計画であるが、そういうことも含めて、中学校のキャリア教育で、専門高校についても、特化するわけではないが、キャリア教育に位置付ける必要があるなということであると思う。
- ・その際に、専門高校に行った生徒たちが、その後、大学がどうかではなく、数がどうかではなく、先ほどの成果の話ではないが、どういうキャリア形成をしていっているのか、どういうふうに自己実現しているのかということが伝わるということは、とても大事である。
- ・それで十分だとは思わないし、それで進路決定するのは難しいかもしれないが、やはり中学生の3年生の段階で、自分のキャリアがどう進んでいくかということを、決定まで行っていくのはなかなか難しい。
- ・そこが、きっと課題なのだと思う。それは、どこまでいっても課題になると思うが、せめて、どういう大学行くかとかということではなくて、どういう人生を歩んでいくか、何を実現していくのかということは、ロールモデルとして、中学生に伝えていきたいと思う。中学生はそういうことが入っていく世代であるので。私も元は教員なので、そういうふうに思う。
- ・「中学校とその保護者、他ニーズに的確に対応した」ということの中身について、中学生が

どのようなキャリア形成をこれから歩んでいけるかということであると思うので、そのモデル等を保護者に見せていただけるといいかなというふうに思う。

- ・おそらく、それが高校の魅力が伝わるということの一つであろうと私は思った。ということを見ると、この文章の中にキャリア形成とか、個人のキャリア形成とかキャリア教育という言葉が入っていると良いと思った。
- ・もう一つは、これを教育課程論で言えば、ここもきちんと書いてあるが、探究的な学びとか問題発見解決能力だとか、もうそれが、全ての専門学科に共通する現状と課題のところにも書いてあるが、課題解決能力を発揮することが重要になってくると、それが、例えば地域課題だったり産業課題だったり、日本の社会的な課題だったりすることを解決する能力を身に付けていくことが、今の新しい教育だということが打ち出されてきているのだろうと思って、その作りで書いている。
- ・その大きな筋があるので、このまとめ方としては、各学科のところにも書いてあるが、トーンがそれぞれ違って、濃淡がすごくある。
- ・やはり、「デジタル社会の実現に向けて」についてを含めると、「デジタルを使える人材を」というような、そういう社会に対応する人間というのは何かというと、問題解決とか問題発見とか、問題に気付くとかということころは、人が考えていかななくてはいけないということになってくる。それぞれの学科に応じて、そこを大事にしているのだということにすれば、今後の課題なのだということが1本線で繋がっていくと思った。

(高橋委員)

- ・課題といった中に、主人公の人ということころをもう少し入れたらどうかなと思う。
- ・そもそも専門学科のDX人材の育成というのは人を育てるところが最終ゴールであるで、それを受けさせる中学生が現高校生になってこうなりたいな、こうありたいなと思わせるには、そうなった人に、実際に中学生や高校生を引き合わせて、こういうことを学んでいたら将来できるようになると想像させる。
- ・そうすると、今、推しの世界になったので、リアルな人に親しみを持つと、その方向に自分がきたら、ユーチューバーが成功しているからユーチューバーになりたい小学生がたくさん増えているという状況になっているので、文章だったり、グラフィックではなくて、実際にそれをやっている人をコンソーシアムのプログラムであったり、出張授業などをたくさん増やすことで、接触の機会を増やす。
- ・そういった実績を、保護者も含めたステークホルダーと呼ばれている人たちに、公開していく。これをデジタルのリアルタイムで行なう。そうすることでDXを活用しながら、今の専門の高等学校は進んでいるのだということが、有効的になってくると考える。
- ・そのためには、学校の時間が大変ない中だと思うが、コーディネーターという外部人材をしっかり入れていった仕組み作りが必要だと感じた。

(角田会長)

- ・ありがとうございます。
- ・非常にまとめになる御意見もしっかりいただけたと思う。

- ・私の進行が悪くて申し訳なかったが、コンソーシアムの重要性と方向と、どうしていったらいいのかということ、専門学科として、何を指して、どう成長しているか、どう見せていくかということで話して、具体的な御提案をいただけたかなと思っている。
- ・それをどうするべきか、専門部会でお話いただくことになるが、各学科、各高校、ぜひ、一歩進むために、どうしたらいいかというようなこと、1人で頑張る時代ではないので、社会全体で、私達と仕組を作っていくにはどうしたらいいのかという部分で、さらに議論を進めていただけたらと思っている。
- ・中間まとめにつきまして、少しやはりここがという部分があれば、先生方がいいか。
- ・本当に本日は、熱心な御審議ありがとうございました。
- ・このあとの流れは、本日いただいた御意見を事務局でどのように織り込んでいくか、御検討いただきたいと思う。
- ・その上で、また修正されたものを各委員の先生にお送りするので、御確認をいただきたいと思う。このような流れで、今後進めるということよろしいか。
- ・以上、審議を終了させていただく。進行を事務局にお戻しする。

(増田部長)

- ・どうもありがとうございました。
- ・今日、色々思い残っているところもあるかも知れないので、そこはぜひ事務局の方にお寄りたい。
- ・その内容を、できる限りを反映した上で、最終的には会長と調整させていただき、皆様方に、中間まとめという形で報告させていただいて、御確認いただく。その様な流れでいきたいと思う。最終まとめに向けては今日の議論をしっかりと踏まえて、専門部会の方でも検討いただきたい。

(安井 GL)

- ・次回、第4回の審議会は、令和6年6月を開催予定としている。
- ・6月の第2週から第3週の間で開催を考えている。開催日については、角田会長と相談のうえ決定させていただきたいと思う。また、特定の曜日などを外していただきたい、外した方がよいといったことがあれば、お手数ではあるが、事務局の方に伝えていただきたい。
- ・具体的な日程は決定次第、皆様方に告知させていただく。
- ・それでは長い時間ありがとうございました。
- ・以上で終わりたいと思います。ありがとうございました。